

ブルターニュにおける散居集落の構造

——レンヌ近郊バッセ村を中心として——

谷岡武雄

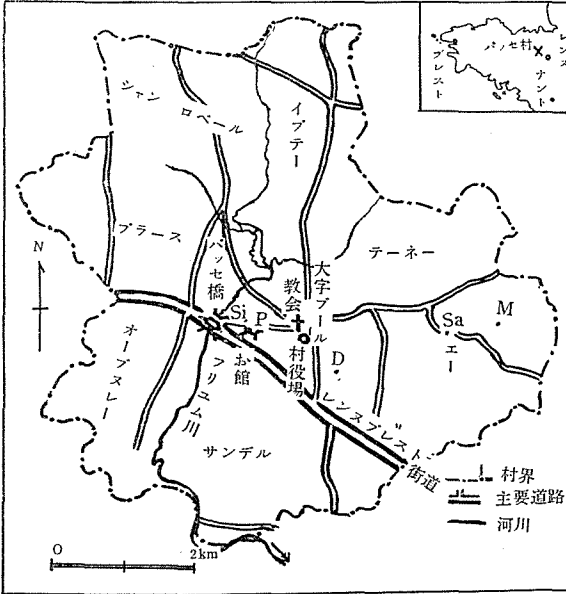
【要約】 西部フランスに典型的な散居集落については、従来あまりにも居住単位の分散および牧場経営の面のみが強調されて来たが、これは改めて考え直す必要がある。筆者が昨夏行つた実態調査によれば、エカールでの生活は、小さいシェフリーにおける集村、牧場経営に囲い地に散村の如く、集落と営農との形態的対応関係は、研究の方向としてはやはりその正當さを失わないが、これを文字通り一対的と解釈すべきではない。ここブルターニュでは、散居農場に小村にブルの構造が、散居農場にブルの構造に変容しつつあり、また土地利用の上では、雑穀栽培を中心とする三圃制が、パン用小麦と飼料作物を主にする多圃制に変化し、果樹栽培がそれを補うことになった。このような集落および営農の進化は、ポカージュ景観の発達をもたらしたが、これがかえつて現在の農村の発展を阻害しているとみられる面もある。

はしがき

集中に分散というフランス学派に伝統的な集落理論にあつては、居住単位の散在という事実が誇張され、かつてアルベール・ドゥマンジュオンが、*éparpillement*なる術語でまさしく表現したような住居の遠心的拡散が、西部フラン

スにおける集落のタイプとして、一般に理解されている。しかしながら、筆者が下ノルマンディからブルターニュならびにポアトゥー一帯を訪れて強く印象づけられたのは、いずれの散在農圃も、農民によつてヴェイラージュとかブルルとか呼ばれる小さいサントルリユラルに機能的に結びつけられ、その社会的求心力と、自己の経営する

第1図 パッセ村要図



D…ドルウイエ氏農場 M…モジ氏農場 P…マダムピノの館 Sa…ソーヴェ氏農場 Si…シノノー氏農場

土地へ住居を近づけようとする、営農上の必要から出た遠心力との均衡の上に立つて、散居景観が成立しているという事実である。このような小村落あるいは村中心なくして、分散的農場の存続はあり得ない。あれほど個人主義的といわれるフランス農村において然りである。しかもこのサン

トルが、新大陸のごとく、自由な機能的社会の結節点であるよりも、むしろ累積的な共同社会の核心としての性格が勝っている点も、忘れられてはならない。

眼を畑に転ずるならば、ポカージュ地帯の例に洩れず、その多くは生垣や樹木のカーテンによつて囲われている。牧畜のためか。どれでもよい、その一つに足を踏み入れてみよう。意外にも眼前に展開するのは、放牧風景よりも、小麦・燕麦あるいはそば畑であるか、りんご畑である場合の方が多い。土地利用の点からみて、西

フランスの中でもレンヌ以西は、北フランス同様に、標式的な穀作卓越地域に属している。② 囲い地の中で営まれている農業の実態は、ちようど多角的経営というにふさわしいものである。田園景観の進化は、先史時代における最初の定着以来、一時たりとも停滞しない。昨日の姿はもはや今日のものではない。目下の課題である『耕地の再配分』が進行すれば、生垣にかわつて有棘電線の囲い地が多くなるかも知れない。

日本の礪波平野や胆沢扇状地のように、代表的な散居地域においては、散居する農家の間に、街路村や市

場町が形成され、それらがルーラルセンターとしての役割を果している。しかも水田耕作が基本であつて、その所有ならびに利益関係は甚しく錯雑的である。このような日本における散居集落の性格は、世界の諸地域における類似のものとの比較によつて、より正当に把握しうるのではなからうか。ここに比較集落地理学の課題の一つがある。以下筆者は、レンヌ北西方九キロにある、イール・エーヴィンヌ県のパッセ Face 村を中心として、ブルターニュにおける集落構造の特色を明らかにし、体系的な集落理論の形成と日本の散村研究のために、ささやかながら一つの資料を提供したいと思ふ。

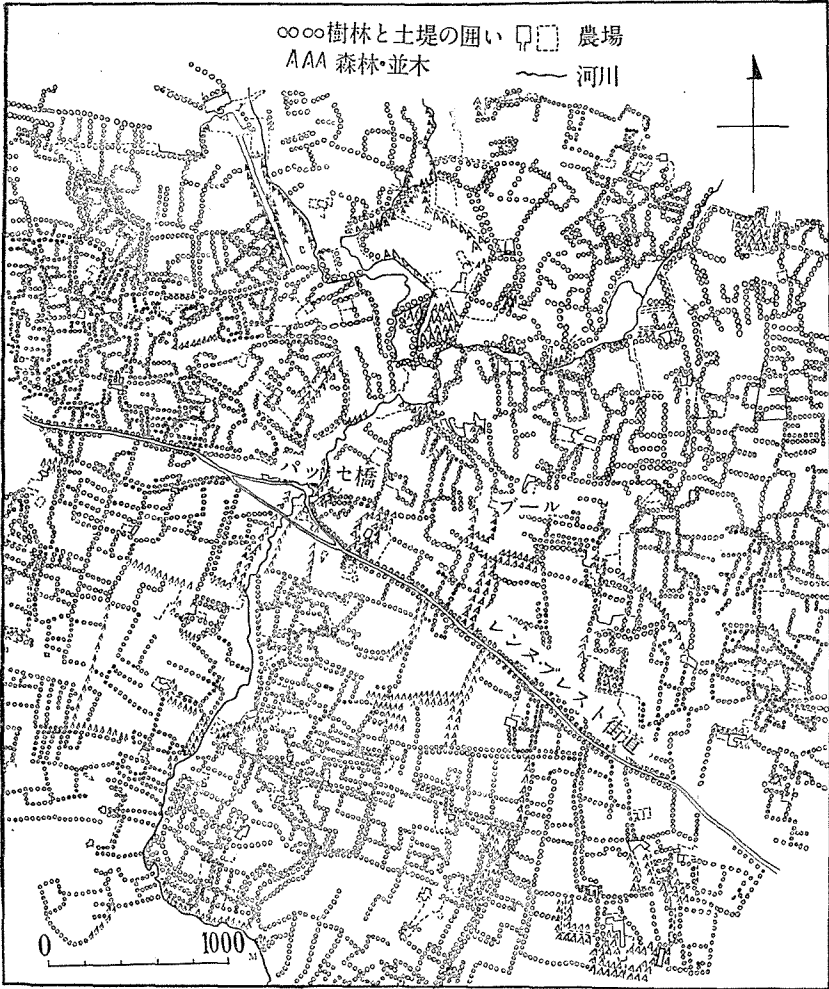
一、囲い地の景観

生垣・堀・土堤・樹木の列・木かげをつくる数多くの囲いによつて、ボカージュは、数知れない小林隙地に穿たれ、仕切られた、広い森林の姿を眼前にあらわす。しかしそれは、家畜の出入りを整理する目的で、人間によつて造られた森林である。ひとたびボイスの開かれた地平線を西方へ、ニールとロアールの谷のかなたへ去るならば、ボカージュすなわち区分された田園、文明と農村経済のオリジナルな一つのタイプの枠内に入る。^③

西フランスの田園景観について、これ以上適切な表現を知らない。西部の景観から、われわれはランドもボカージュも、抽き去つて考えることは、できないであろう。平坦な道路をドライブする旅人にとつては、やや疎かな林中にある感じが与えられる。ときどき森の中に石造の農家がちらりと現われては、すぐもとの疎林の沈黙の世界に戻る。これを機中から見下せば、不規則な格子縞をつくる樹木の区切りが、強い印象を焼き付けるのである。これが西部だ。とくにレンヌ盆地では、村中心を除けば散居農場が卓越し、ボカージュ景観が典型的であると言われている。^④ 筆者のフィールドとなつたパッセ村は、こういうところにある。

さて、ほぼ直線状に一行、まれには二〜三列で土地を区劃する囲いは、通常その高さが約一メートル、底幅が約一五メートルの土堤の上に、しばしば刈込木カシに仕立てられたブナ・カシその他の樹木が植えられているものである。西ブルターニュの如く、数メートルほど土堤を盛りあげるとか、その上にハリエニシダを植えるとかのものは、あまりみうけない。シードル生産地帯のこととて、樹木もりんごであつたり、刈込んでいなかつたりする。囲いの傍は、樹

第2図 バッセ村における囲い地と森林の分布



木が根を張る上に、日蔭であるため、除地となつてゐる。隣畑の耕作者の通路としても、ここを空けておかねばならない。ヴァンデ地方において、シャントル Cheintre と呼ぶのは、かかる除地である。

第一図は、主として一九五二年作製の

五万分の一航空写真に基づき、パッセ村における林地と生垣ないしは樹木の囲いの分布を示したものである。こういう囲いは、あるいは屋敷森となつて住居を隠蔽し、あるいは道路や畦畔・境界に沿うて農牧地を取り巻いている。その機能は、防風、木材の供給、そうしてもつとも重要な家畜に対する畑の防禦のためといわれている。一区劃の大きさは非常にまちまちであつて、小さいもので僅か三ヘクタール足らず、大きいもので二一三ヘクタールを計測したが、七〇ヘクタールがもつとも多い。ただし除地を考慮に入れると、実際の作付地の面積は、もつと狭くなる筈である。開放耕地が共同主義の表現であるのに対し、ボカージ^ニは何よりも個人主義、すなわち土地の私有の力強い宣言の反映であるといわれている。しかしながら、今日では、一つの囲いが一人の所有、一人の利益を意味せず、その中にはさらに幾つかのやや大きいめの地条べんせうに分かたれ、異なる所有者、異なる経営者が入り混つている場合がしばしばである。さらに住居と囲い地の大きさとの関係を見ると、概して居住地近くでは小さく、それを離れるにつれて大きくなつてゐる。だからブルや各大字の中心部付近では小

さく、そこから遠ざかるほど大きい結果となる。このことは、一面において、土地利用やその集約度の相違、すなわち屋敷のまわりに菜園やりんご園が多く、住居から遠く隔つたおもに湿地は、放牧地に宛てられる傾向に係属しているが、他面において、古くから居住をみたような肥沃な土地ほど、それに対する所有ないしは利益の主張が強いため、細分されざるを得なくなるという事情に由来している。

囲い地の形状は、第二図の如く四辺形が普通であるが、あまり整然としていない。ことにフリム川の兩岸に沿うものは、甚しく屈曲している。また畑の全体が囲われず、その一部を欠除する場合もかなりみられる。囲い地の歴史の古さというものであろうか。ところで、この一世紀半以来、ブルターニュの各地では、農村人口が増加し、荒蕪地が開墾されたので、古いボカージ^ニの外側に新しいボカージ^ニが付け加わり、その景観は一層顕著となるに至つた。こういう点からみても、ボカージ^ニ景観は、その外見にもかかわらず、固定的に考えるべきではない。^⑤樹木の列そのものよりも、むしろ区劃の仕方に問題がある。

一般に囲い地の区劃方向は、主要道路に規定され、みず

からは内部における地条の方向を拘束している。地籍図や航空写真にみられる個々の囲い地の区割方向は、千差万別であるが、ここに巨視的な観点を許すならば、おのずから一つのタイプが浮び上つてくる。それはブルと呼ばれる集居部からパッセ橋へ通ずる道路の方向と、それにほぼ直交する道路および橋以南屈曲点に至るまでのフリュム川の流路方向とである。これは南北線で約二〇度東へ偏つており、東西線ではやや偏向が少ない。とくにレンヌ・ブレスト街道以南の地区で、新開地の規則正しさとは異質的な、やや整つた格子縞がみられるが、それ以北の農道や囲いの方向の中にも、不明瞭ながらそれが認められる。川の西側では整い過ぎているかまたは乱れ過ぎていて、いずれも土地割の比較的新しいことを思わしめるのに反し、川の東側では整い方の程度から、より古いことが推測される。これはどのように解釈すべきであろうか。

まず地質・地形条件との関係があげられる。ブルターニュは、片麻岩・花崗岩・片岩類や、古生代の砂岩・石灰岩等から成り、堅い岩石は残つて山背をつくり、軟かい岩石は削られて窪地をなす広大な胴体山地である。半島の東部

では、アルモリカン山系の方向は、西北西―東南東走しているが、全体として南に傾動し、しかも西部とちがつて、内陸ではほぼヴェレーヌ河を軸とする曲動を受けているため、ここにその河の集水するレンヌ盆地が形成されている。パッセ村は、この盆地のほぼ中ほどに位置する。村の北方には花崗岩山地がみられるが、一度準平原化されたところだけに、村域内にはかかる山地は存在せず、ただ一部にシストや千枚岩の低い丘を残すか、二次的に開析された谷壁に、この種の地層をのぞかせているに過ぎない。そうして村の主要部はロームをかぶり、フリュム川の南西側および村の南東端では砂礫層が覆つていたのであつて、僅かに谷に沿うて、沖積土壌が分布している。概してこの砂礫層地帯のボカージュ景観は、歴史が新しいのに対し、街道以南でフリュム川の屈曲点より北東側にある、問題の土地割を示す地区が、ブルの地区同様に、ローム層土壌であるのは興味深い。つまり村の標式的な土地割が、より肥沃なローム層と分布の上で、ある程度関係をもつらしいのである。またフリュム川の流路方向も、部分的に考慮に入れてよいであろう。しかしながら、このような地質・地形条件

は、土地割の分布にとつて、間接的な意義しかもつていない。つぎに卓越風についてみよう。一般にブルターニユでは、夏の東または南東風は気温を上げ、冬に時々訪れる東または北東風は冷いものであるが、いずれも晴天をもたらすので、農作物にとつて何ら危険ではない。これに対し、秋冬には、曇天としつような細雨をもたらす南西風、それを追い散らす冷い西または北西風が吹く。とくにノロアは、恐ろしい雷と強いわか雨を伴う寒風で、農作物に甚大な被害を及ぼす。かくして、北東―南西方向に連なる、樹木を植えた土堤は、このノロアに対し、防風の役目を充分に果すものなのである。^⑥

とはいふものの、土地割の方向を単にノロア除けのみから説明することは困難である。メイニユおよびギルシエの記すところによれば、ブルターニユの土地区割には、一つではなく、五―六のドミナントな方向がみられるからである。^⑦この二人の地理学者が示した例は、サン・ブリュー付近のもので、それはわれわれの例とは異なり、N二〇度W偏している。ブルターニユにおける古道の方向が、巨石記念物の配列やローマ軍道の方向に一致する場合がかなり多い。

未だ復原されていないが、古代ローマのケントゥリアも、この地方において実施されたといわれている。^⑧またこの地方で、*やぎ*の語尾をもつ地名は、ローマの領地と関係があり、レンヌ南方の *Taille* (ラリウスの農村における領地の意) 村が、その一例である。^⑨史料を欠くため、ここで *Face* 村も同様であると主張するものではない。三世紀の後半よりサクソンの戦士がしばしばブルターニユを侵略し、レンヌもそのために城壁が建設されたほどである。そうしてこれより西方の地域では、五世紀中葉より本格的に植民が始まり、六世紀にはブルターニユのブルトン化が急速に進むわけで、これによつてローマ的なものはほとんど払拭されるに至つた。けれども、地名分布からみれば、レンヌの少し西方が、九世紀におけるブルトン地名の東限をなしているのであつて、^⑩したがつて、パッセ村の位置する付近が、完全にブルトン化されたかどうかは甚だ疑問である。たとえ彼らに占居されてしまつたにせよ、他地域と異なつて集居的なヴィラを造らず、かなり著しく分散しているブルターニユの集落型は、ガロマン時代も、ブルトン化の後もあり変つていないといわれるから、この村にみられる特徴

的な土地割の主要方向を、少くとも骨組みに關しては、ブルトン時代にまでさかのぼつて考えることも、必ずしも不当ではないように思われる。しばらく後考を待ちたい。

二、村域と人口の推移

村の面積的規模は、住民の數に比例し、土地生産力に反比例すると考えてよい。一九五四年のセンサスによれば、フランスのコミュニティは、面積の平均が一四五〇ヘクタール、人口の平均が一一二五である。⑩問題を農村に限るならば、最大はロースデルタのサント・マリイ・ドゥ・ラ・メールの三六九五二ヘクタール、最小はオート・アルプのモン・ドゥフィンモン・ドゥ・フィンの僅か二・一六ヘクタールである。概して、東北部およびピレネー北麓の地域は、小規模の農村、ブルターニュから中央山塊アピニヤン山塊を経てランド地方に至る西および西南部の一带と、アルプスおよび地中海沿岸地域は、大規模の農村によつて占められている。パッセ村も、この大コミュニティ地域に属するため、一九五八年現在で、三四〇三ヘクタールの面積をもつていて、フランスの平均よりも倍以上もある。そうして村域の形状は整わないが、ブルを中心

に考えると、ほぼ円形に近い。これはフランスの平野部にみられる村のタイプである。このような現在の村域は、アンシャンレジームアンシャンレジーム以来の教区パロキヤ、収税の目的をもつ共同体コミューナ、一七九〇年以來教会のある場所に役場を置くことにして設定された行政村の範囲に従つて、定められたものであるが、あまりにも大きいコミュニティは、それ自体が集落の単位をなすのではなく、諸単位の並置と考えた方がよいと、メイニエは述べている。⑪今日の村中心をなすブルも、そこに教会が建立され、教区が設定されたことも、永い居住史からみれば、かなり後代のものなのである。つまり、幾つかの隣接する集落単位が、宗教的・財政的・行政的理由からまとめられ、時代を経るにつれてこれら相互の社会的接触が密となり、やがてそれ自身で大きい集落単位に成長したものと考えてよい。これが現在のコミュニティである。ただし今日のコミュニティの範囲は、伝統を尊ぶフランスにおいては、しばしば合併を繰返す日本の場合ほどに、変化が激しくない。

アルシーヴ・ナショナルにも、村役場にも、何ら古文書が残されていないので、パッセ村の歴史について、詳細

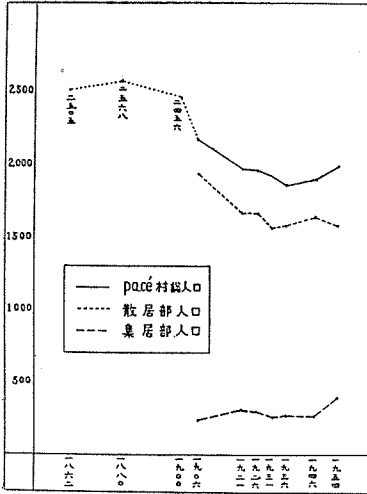
に知るよすががない。幸いにも国立図書館には A. Willem Bleu 図が蔵されていて、その中に Pace の村名を見出すことができる。図は、村に役場が設けられるよりかなり以前の、一六三〇年ころのものである。筆者が実態調査を行った他地域の農村、とくに沿海村落の場合、往々にしてこの図には村名が記されていないことから推して、この内陸の村の歴史は、相当古いことが知られるのである。そうしてここは、ブルターニュに共通した性格を有していたようで、一七六八年の地名辞書によれば、

『この教区は、穀物・果実および牧場の地方にある』

と明記されている。現在もその本質はさほど変っていない。これがさらに一七八〇年代の地図になると、やや委しくなる。すなわち、村の中央を南東から北西へかけて、レンヌ^⑩『ブレスト街道が通過し、それを北から南へ切つて、ヴィレーヌの支流フリュム川が流れている。川には水車が掛けられ、明瞭に認められるものでも三箇所を下らない。そうして村域内には、多くの散居農場の記号と字名とが書かれていて、フリュムの小さい谷にもそれが及んでいる。現在の村中心に相当する箇所には教会があり、本街道よりそこ

へ達する脇道が引かれている。このように農場と教会のある中心部とから成る村の構成ならびに骨格も、隣村の名称およびそれらとの位置関係も、現在とほとんど同様である。かかる点から推しても、村域が先述の行政村設定以前からほぼ決つていたものと考えられる。

変化の少ない境域に対し、村の人口規模は、かなり顕著な変動を示して来た。一般にフランスでは、コミューンの人口規模は五〇〇〜一〇〇〇人クラスがモードであつて、その小さいものは東北部やピレネー北麓に多く、この点で面積的規模にある程度まで比例している。問題を農村に限るならば、その最大はブーシュ・デュ・ローヌ県の二七〇〇人、最小はミューズやオート・ピレネー県の二七〇人で、平均は五九〇人となつている。こういう数字からみれば、パッセ村の人口一九九一（一九五四年、内二〇人は村外、四人は外国人）は、ブルターニュの例に洩れず、かなり大きい部類に属する。人口密度一平方キロ当り五八人は、日本でいえばかなりの僻村であるが、これがフランスでは平均（八〇）より少し低いという程度に過ぎない。われわれはこのような数値を、時間的な座標において考察しよう。

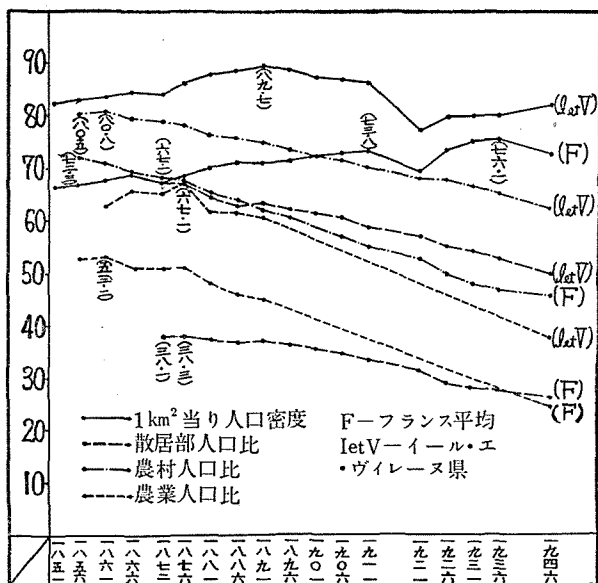


第3図 Passé村の人口推移

第三図は、種々なる資料より、Passé村の最近一〇〇年間に於ける人口の推移を示したものである。それ以上古い資料が得られず、ために村の歴史を追及するのをかなり制限されるのは残念であるが、現在の状況を説明するのに、この程度で我慢しておこう。さて、この村の人口は、図に示す如く、一八八〇年を頂点とするが、十九世紀にはさほど変化がなかつた。しかるに二十世紀に入るや、それは急カーヴをえがいて減少し、一九三六年のセンサスには、一八五六人すなわち最高値の二八%減という最低値を示した。ただそれ以後は漸次的ながら復調の傾向にある。一九〇六

年度からは、好都合なことに、集居部と散居部とに分けた人口の記載があるので、それをグラフに描いてみた。一見してわかることは、散居部人口がこの村の人口推移とほぼ同じ傾向を示しているのに反し、集居部の方は、漸増・停滞・そして急増の経過を辿つて来た。ことに第二次大戦後、散居部人口の減少にも拘わらず、総人口が増えているのは、全く集居部人口の増加に負うものである。このような変化は、より広い地域における現象と、どのような関連を持っているか。

第四図は、イール・エ・ヴィレーヌ県およびフランス全体の人口推移に関するものである。人口密度を指標とすれば、フランスでは、第一次大戦直前に第一のピークを迎え、一たん急減の後、一九三六年に第二のピークに達し、以後は充分回復していないのに対し、農業県のイール・エ・ヴィレーヌでは、Passé村と傾向が全く同様である。しかも図に示した如く、この百年間に、農村人口比・散居部人口比および農業人口比は、ほとんど直線的に遞減している。つまりPassé村のえがいた人口カーヴが意味するものは、居住様式の上では、散居部から集居部への住民の移転ない



第4図 イール・エ・ヴィレーヌ県とフランスの人口推移

しは前者の減少と後者の増加であり、生活様式の上では、第一次産業より第二次・第三次産業への徐々に転換である。これが全国的には、農村の都市化あるいは農民離村と人口の都市集中の傾向となつて現われる。散居人口の減少こそ、種々なる人口問題の根柢に横わる、基礎的事実には

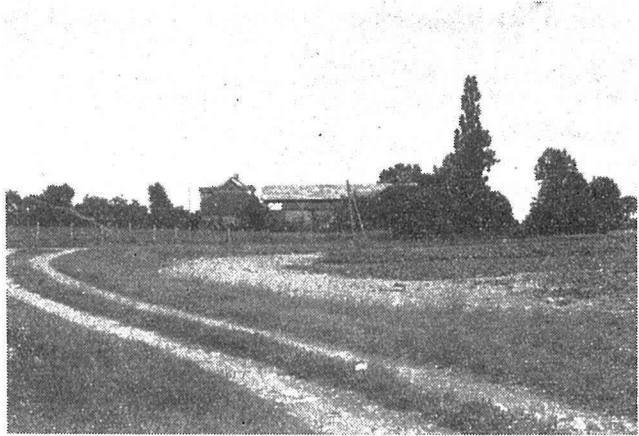
かならない。かくして、農村的色彩の強いところほど、十九世紀におけるピークは、より早期にあり、人口減少も早くから始まつていたのである。また、ごく最近におけるパッセ村およびイール・エ・ヴィレーヌ県の人口増加は、農業の発達に伴なう農村の人口可容力の増大に負うよりも、むしろ地域開発計画に基づく工業活動の発展によるものと考えらるべきであろう。

三、集落の形態と構造

内陸ブルターニュでは、農村生活の単位をなすものは、行政村や教区ではなく、一つの小村と若干の散居アグリとから成る大字 *quartier* であつて、それは特有の慣習と祭事によつて他と区別されるのが普通であるが、これに反し、レンヌ盆地でみられるものは、孤立農圃への絶対的な分散であると、ドゥマンジュオンが述べている¹⁵⁾。しかしながら、絶対的分散とは甚しい誇張であつて、パッセ村の集落は、そのような傾向を若干持つている散居農場と、それらの中心としての集居部落とである。集居部には大小二つあつて、大きい方は *Douig* と呼ばれる村の中心であり、もう一つの

小さい方は、レンヌ・ブレスト街道上フリュム川に架けられたパッセ橋付近のものである。ただしこれは小さいので人口統計の上では散居部に属している。一九五四年の統計によれば、この村の家数は四三九（世帯数五一八）で、そのうち散居部の家数は、いろいろの資料に基づいて調査したところ、三四一なる結果を得た。つまり全体の八〇%が分散し、残りの二〇%が集中するわけで、この率は散居部一五七九人、集居部三九二人という人口比とはほぼ同様である。人口の場合、パッセ橋のものを計算に入れると、集居部のウェイトは一層大きくなるであろう。ドゥマンジュオンの公式に従つて分散係数を算出すれば、二七五となつて、非常に高率であるが、それにもかかわらず散居農場の中央に集居部が存在する事実こそ、重視すべきである。

散居農家は、日本の散村地帯と同様に、たいてい開かれた内庭をもつタイプである。母屋を始め、鶏舎・牛小屋・豚小屋・納屋・ギャレージ等の付属施設が、四角い中庭を囲むように配置されている。閉じられた中庭をもつ家のタイプが、穀作を主とする北仏に分布するのに対し、開庭型は家畜が農村経済にとつてかなり重要な役割を果す西お

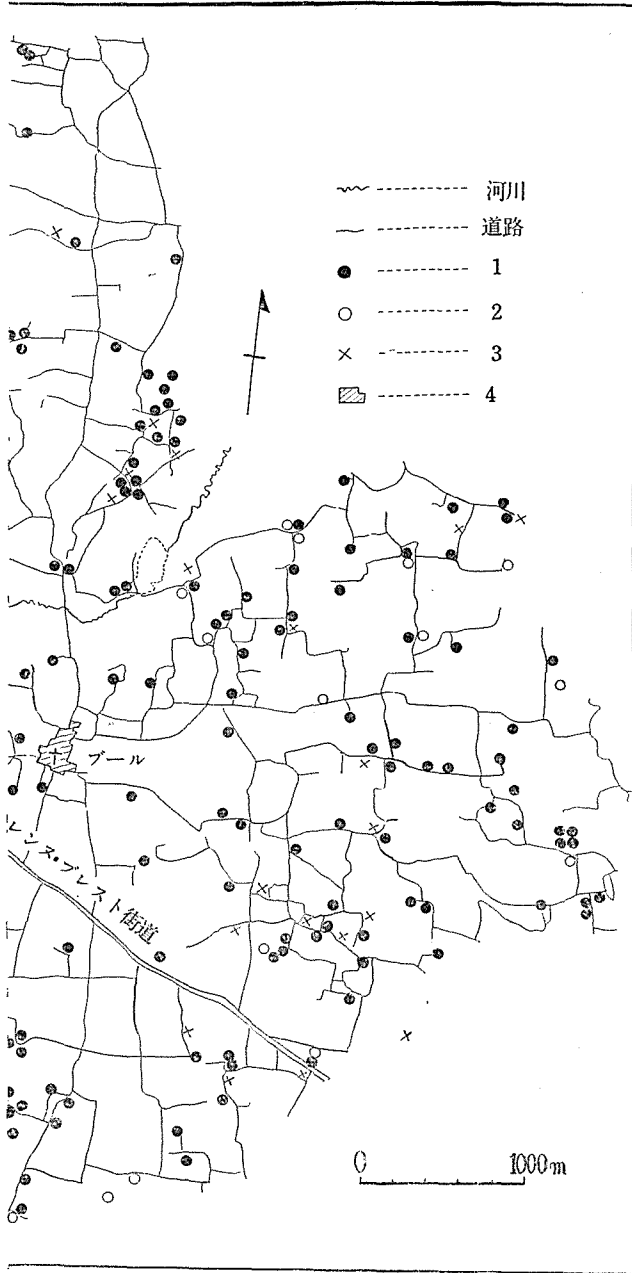


りんご園と牧場に囲まれたパッセ村の散居農場

よび北西フランス、イギリスさらに北アメリカに多くみられるものである。写真に示した例では、屋敷森が半ば取り払われ、農家に隣接した乳牛の放牧場は、有棘鉄線によつて囲われていた。なおシードル小屋があるのは、この地方の特色である。建築材料はやはり手近かに求められるので、古い家屋では岩を積みあげたものが多く、屋根はスレート葺きである。しかし煉瓦壁やコンクリート壁が、次第

に普及しつつある。また土間は石を敷くか、コンクリート
 になつてゐる。近年における都市化の作用も、散居農家の
 中へ次第に浸透して来た。都市の影響は、まず内部の設備
 について行われるもので、古い薄暗い母屋の内部も、明る
 く改造されたし、とくに台所の設備は、全く農家にあるを

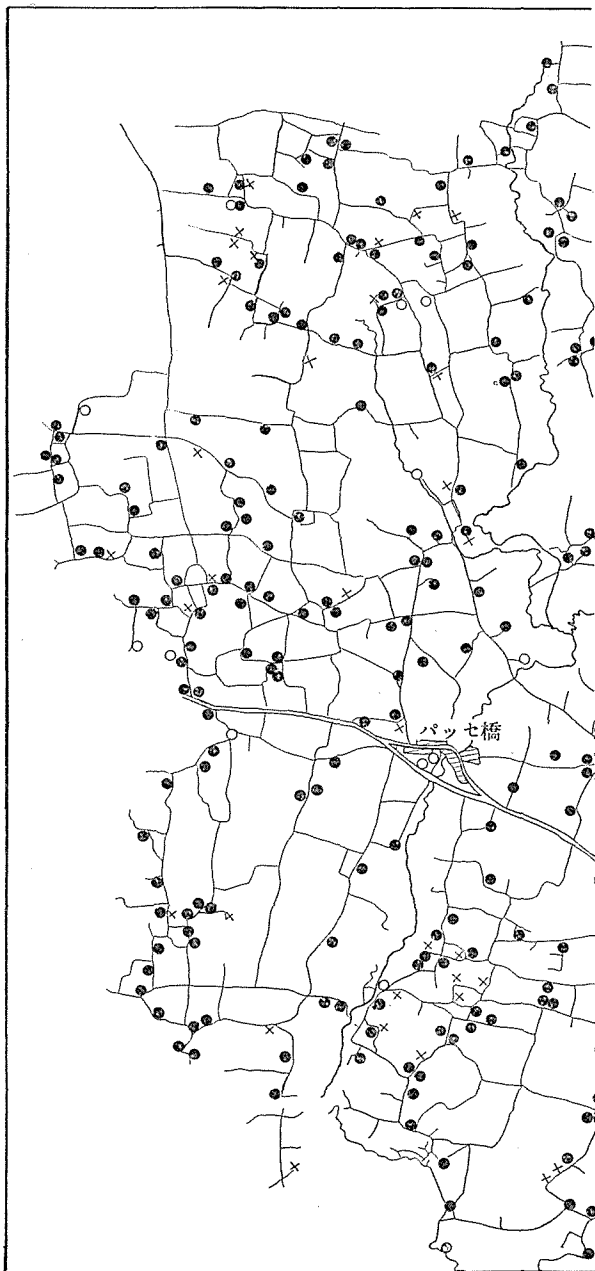
思わせないほど整つて来ている。
 さてこのような居住と経営の細胞が若干数集まつて、集
 落社会の第二的な単位をつくる。それが大字である。パ
 ッセ村では、これが八つ数えられる(第一図参照)。パッ
 セの集居部は、別々の大字から集まつて来て構成された街



2. 1851年当時存在しない現存の新しい散居農場
 3. 1851年当時存在したが現存しない散居農場 4. 集居部

路村で、これは村域外との関係生活に依存するから、この際は別個に考えねばならない。ブルも大半が集居的ながら、ごく僅かの散居部をもつ一つの大字である。しかしそれは Doug の名が示す如く、村内居住者にとつて町的な機能を果たすところとなっている。ブルターニュでは、教会が位置する集落は、たいていこのように呼ばれているらしい。²⁰⁾

ギルジェが、同じブルターニュに属するフィニステール県のある農村を調査したところによれば、散村地帯といわれながら、全家数の約二二%はブルに、六二%は二戸以上一戸までから成る大小のアモーに集まり、純粋の分散家屋は、僅か一六%に過ぎなかつた。そうして集落は、ブルーアモーに散居農場というように、構造づけられている



第5図 パッセ村における散居農場の分布とその変化
1. 1851年当時存在した現存の散居農場

のである。パッセ村も同様である。ブルターニユが散居地域であるといつても、それはたいい小村を構成する意味においてであつた。われわれは、こういう点を考慮に入れて、再びパッセ村に戻ることとしよう。

第五図は、一八五一年の地籍図総図と、一九五二年の航空写真とを比較して、パッセ村における散居農場の分布と最近一〇〇年間におけるその変化とを示したものである。

この図によれば、二つの集居部を論外として、他の七つの大字には、若干の家屋が疎らながら集まつて、おのおの中心となつていような箇所が、おぼろげながら認められる。ことに中央のブルより北にある大字イプター、南にある大字サンデルにおいて顕著である。これらは居住史がより古いと思われるフリニム川左岸すなわち東側のローム層地帯に相当する。しかるに右岸の砂礫土壤地帯の部落では、かかる傾向を明瞭に認め難いのである。残念ながらわれわれは、この地区において、ブルターニユのメジメジョンとか下ロアールやヴァンデのギャニユリーgagnerieとかの、囲い地中の囲われない畑を発見できなかつたが、この点を追及すれば、上記の小村の古さが、一層明らかとなるであ

らう。しかもブル自体が、若干の散居農場を従えている。こういう事実から考えられるのは、かつてはこのレンヌ盆地にあつても、やはり、恐らくガロマンのフンドゥスに起源をもつといわれる疎なる小村的なものと、それをめぐる幾つかの散居農場とを合わせた大字が、個々の家の上に位する二次的な集落単位をなしていたが、その中の一つのアモーに教会が建設されてブルとなり、その後ブルは小村および散居農場の信仰中心から行政中心・経済中心として発展し、ついにその支配力を全村域に及ぼして、ここに第三次的な集落単位ができあがつたということである。一般に西部における散居の成立は、小村よりも新しく、十〜十三世紀の旺盛な個人的開拓によるものといわれている。この村に多い地名や地名をもつ散居農場は、この種のものなのである。だからアモーこそ、より基本的である。しかしながら、パッセ村はブルトン地帯の縁辺部ないしは非ブルトン地帯に属するために、西ブルターニユにみる如く、強固な共同社会をもつアモーの形成は、もともと充分ではなかつた。そのうえ、レンヌより九キロの近距離にあるため、都市の影響が他よりも早く及び、したが

つてブルルへの集中と共に、さらにそれ以上に都市への人口流出が顕著で、アモーを中心に一種の共同社会をなす集落の構造が、比較的早期に弛緩してしまつたのではないかと考えられる。

パッセ村の中心ブールは、レンヌーブレスト街道からやや外れてゐるが、村のほぼ中央部に位置する。梯形の広場の真ん中にカトリック教会があり、サントル・リュ



パッセ村のブールの教会と中央広場

ラルにふさわしく、そこから道路が四方へ通じている。広場には溜池もその他の施設も何ら存在しないが、村人が集まつて年中行事を催すに充分広く、六月二十九日の村祭り、十月十六日の氏神祭り、両日行われる年二回の大市マール等の場所マールに宛てられる。大市の日以前には年五回で、祭日も違つていたが、次第に整理されて年二回とし、村の祭日をそれに合わせることになつた。二階建ての村役場は、この広場から南へ進んだ曲り角の、小さい三角広場の前にある。事務室は至つて狭く、一人の書記が常時勤務するのみで、他の部屋は村人の会合に使用される。村長は通常、役場にはいない。中央の広場に面しては、キャッフエ・レストラン・パン屋・美容院その他が軒を連ねている。また広場の西南隅に接して、共同洗濯場のあるのも興味が深い。筆者はフランス農村の巡検中、しばしば共同井戸や共同洗濯場をみたものである。このようにして、広場をめぐるとこの町パッセは、村民にとつて、宗教上・行政上・商業上ならびに社交上のセンターの機能を果たすようになってゐる。逆説的にいえば、こういうセンターがあるからこそ、農民は散居しうるのである。フライトレの調査によれば、ブルターニュの散居地

域における集居部すなわちブルーヤヴィライジユの境域の規模は、五〇〇一五〇ヘクタールがモードで、かつ二〇〇ヘクタール以上のもは少ない。パッセ村のブルーのそれは、三〇〇ヘクタールを越えるほど大きい面積をもっている。それだけに、中心的機能も強いというわけである。

広場から西へ向う古い道路は、ピノー村長の「お館」の北側を通り、だらだらと下つた後、以前のレンヌ・プレスト街道と合して、パッセ橋にかかる。ここでは旧国道に沿うて小さい街路村が形成されている。村にとつては、二次的な商業中心であるが、交通的機能の方がかなり重要である。しかし現在は、この集落を通らない直線道路が南側に敷設され、バス停留所は新しいパッセ橋の方にある。そこはまだ集落が形成されていない。因みにこの街道を走る乗合バスは、レンヌより一日往復二回のディナル行きと、一回のモーロン行きとがあるだけで、村民の足としては、あまり役に立っていない。ブルーと村内の各地とを結ぶものは、よく舗装された村内道路の上を農民が駆る乗用車とトラック、そうして一六箇所の電話である。

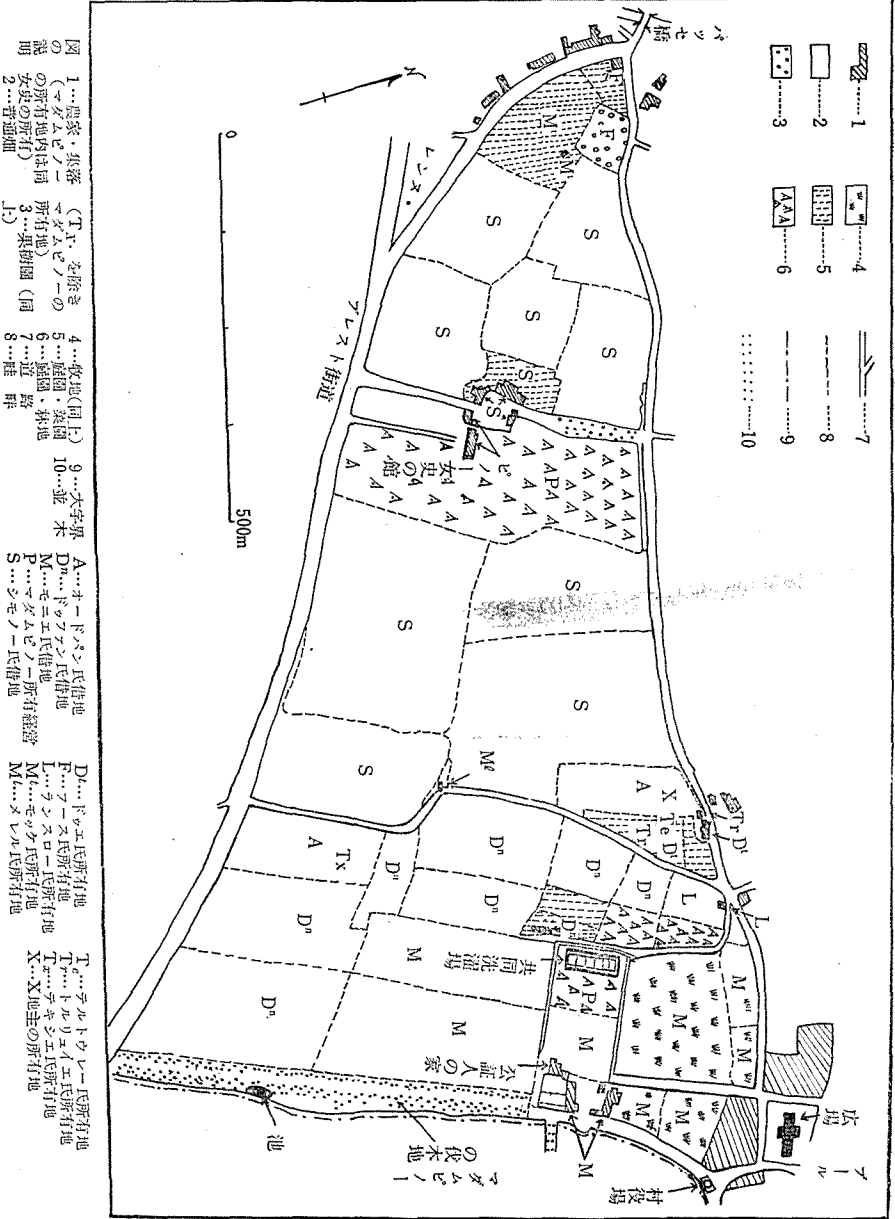
集居部の機能を知るため、この村の非農家の職種を、ボ

タン・デバルトマンタルによつて調べてみると、第一表の如くなる。これらは家畜商を除き、ブルーかパッセ橋かで営まれるものである。この表には、農業機械商やシードル取扱商人がみられないが、これはレンヌに近いためかも知れない。通常、非農業職種の数は、農村の人口規模に比例するもので、筆者がフランス各地から約五〇村を選んで調べたところでは、人口五〇〇の村で一〇種、同一〇〇〇の村で約二〇種となつていた。パッセ村は二〇〇〇人足

第1表 パッセ村における非農家の職業

職	業	数	職	業	数
役員	書記	1	肉	屋	4
司教	局	3	豚	屋	3
郵便	私	1	**	商	1
公証	人	1	端	屋	1
医	師	1	紐	屋	1
薬	士	1	靴	屋	1
測	士	1	***	商	4
自動車	レー	2	織	商	3
自動車	レー	1	馬	商	3
自	車	2	家	畜	1
自	車	1	穀	物	1
	屋	2	製	粉	1
	屋	1	木	工	1
*ホ	ル	3			
キレ	ユ	2			
	ン	1			
	テ	2			
	フ	3			
	ラ	2			
	エン	1			
美車	院	2			
指	工	3			
蹄	師	4			
仕	工	4			
	屋	4			
	立	4			

第6図 ビノ一女史の所有地の一部とその小作関係

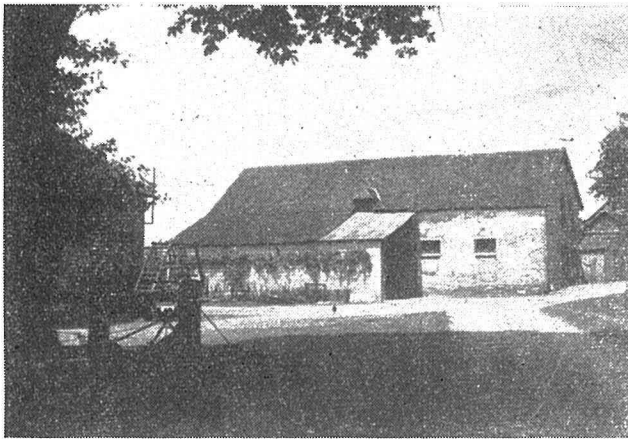


らずだから、これほど多くの業種がみられるわけである。

一九三〇年当時、この村の非農家は一五種しかなく、かつ穀物商が製粉業を兼ね、滑稽なことには、木挽工場経営者が、新柄服地を取扱っていた。また一九〇〇年当時は、めだつた商人としては、肉屋がいるに過ぎなかつた。ただし公証人は、すでに一八六〇年代のボタンに見出し得る。このようにみくると、一般的なアーバニゼーションの進行が、人口の減少にもかかわらず、在村商人の機能を分化させ、専門化させて、総体的にその数は増加して来たことがわかる。ここに、職人や商人など非農業的要素を次第に排除していく山村の場合と、パッセ村のような都市に近い平野農村との間に大きい差違がみられるわけである。

集居部の住民としては、右のほか地主、少数の農民、若干の農業労働者および都市への通勤者がいる。村内居住の地主は約四〇、村外の都市その他に住む不在地主は約一五〇である。巨大地主は存在しないが、多数の小地主よりも少数の農場経営者の力の方が強い、パリ盆地の農村に比べると、この地方における地主の勢力には、なおあなどり難いものがある。村内居住地主は、ほとんど農場に住まず、集

居部にあつて商業を兼ねていたりする。つまりブールは、土地所有を通じて、散居農場を支配しているといえよう。ブールの西はずれにある「お館」に住んでいるのが、村長のマダム・ピノーである。この六〇歳を越える老女史の夫



マダムピノーの小作農シモノ一家

は米人で、もはやこの世にいないが、彼女は二五〇ヘクタールの大地主として、村内になお勢威を振つている。第六図はブール付近にある彼女の所有地とその経営者とを

示したものである。所有地は地図にすべてがあらわれていないが、お館のまわりに展開し、これをシモノー氏始め七人の小作人が借地して経営している。ピノー家は村の素封家らしく、一八八〇年の記録にも、村長として地主のピノー氏の名を見出す。だがこれは彼女の先代のようである。お館シヤトと呼ばれるだけあつて、室内装飾もかなり凝つたものであるが、建物自体はさほど古くはなく、一七八〇年代の地図にも、このシャトールは記されていない。だから、それ以後に土地を集積したものと考えられるのである。

散居農場の住民は、自作農 *faire-valoir direct*・小作農メタイエおよび農業労働者である。分益小作農メタイエはもはや存在しない。一九五六年の農業センサスによれば、農業経営者二五一、農業労働者一二四となつている。この農業経営者のカテゴリーに属するのが、自作農と小作農とであつて、彼らは一部を除き、散居農場に住むわけである。fermier は、小作人と訳されているが、これはあまり適當ではない。彼等が耕地と時には住居とを地主から借りている点では、日本の小作農に当るが、多くの常時ないしは季節的労働者を雇備し、コンバインその他の進んだ農業機械を駆使している点

からみれば、農場経営者と呼ぶ方が適切である。農業労働者は、雇備主に、棟を宛てがわれるとか、集居部に住むとかしているものである。かくして、この村の農民の階層構造は、地主・自作農・小作農または農場経営者・農業労働者という、比較的単純な四層から成つている。一般的にいうならば、フランス農村を支える安定した自作農の増加という方向への、近年における努力から、大地主や分益小作農が減少し、農村社会は、階層分化よりも、その平均化へ向つて進化して来ているのである。パッセ村は、その明らかな例である。しかしながら、イール・エ・ヴィレーヌ県では、次第に減少して来たとはいうものの、なお若干の分益小作農が残存している。自作農と小作農との数を比べると、もつとも農村社会の進んだレンヌ南部のルドン地域を除けば、やはり後者の方が多い。農民は、住居も自分で所有するようになって来たが、なお半数は借家というのが、県の現勢である。農業経営規模で、もつとも多数を占めるのは、北部のドル地方を除き、一〇〜二〇ヘクタールクラスである。しかるに、パッセ村の一経営当り農牧地面積は約一三ヘクタールであるから、県のモードにも達しない。

つまり、地方都市の近郊という点で、遅れた分益小作農を解消し、農民階層は単純化したのが、そのかわり平均経営面積がやや小さく、非農業的要素が多くなつて、全体としての村の社会は、複雑となつているのである。農場にあつても、レンヌに通勤するものが若干あらわれて、農村社会を簡単に図式化することには、一層困難さを覚える。

農民の階層構造、農村社会の性格の顕著な変化にもかかわらず、元來地理的慣性の強い集落の景観および構造の進化は、まことに緩慢なものである。再び第五図に戻つて、この点を考察してみよう。図の示すところによれば、最近一世紀間に、新しい家屋の建設は、散居部では一そうその景観を強める方向に、集居部ではそれをより大きくする方向において行われたことが、微弱ながら認められる。いかえると、前者はより農業的に、後者はより商工業的に進みつつある。しかもこの進化によつて、すでに述べた如く、散居農場がそのすぐ上位にある小村的なものを通さずに、直接ブールや街路村に結びつくようになった。農場・小村^{ブル}町の構造が、農場・町のそれに変化しつつあるわけである。交通手段の発達はこのことを容易にし、農業共同組合

や消防組の結成、その他さまざまな村単位の社交団体の組織化は、それを促進している。

単に図のみに頼れば、散居部では、この一〇〇年間に甚しい外見上の変化を来さなかつたように思われるかも知れない。しかしながら、二つの集居部を除き、現在三四一戸を数える散居農場を仔細に検討すれば、一八五一年当時、三六〇農場存在したものが、そのうち四〇は消滅し、新たに二一が増加して、現在に至つていのである。このように意外な変化の上に、各農場の所有者や居住者についても、常に変動が絶えない。たとえば筆者が訪れたソウヰ家は、五年前に北隣のサン・グレオール村から移つて来た自作農である。彼は前住地で二六ヘクタールを小作していたところ、その地主が経営地を他へ売却したので、たまたま現在の土地を所有していたブジュエ夫人が、レンヌへ転住することを知り、彼女より二〇ヘクタールの土地と建物とを購入したものである。転住によつて、彼は小作より自作へと農民階梯を一段上昇した。このような例は、他の散居地帯にも多い。つまり、集落の外形はさほど動かないが、その内容は常に変化しつつある。内容と外形、社会と集落

第2表 パッセ村の地目別面積 (単位ha)

地目	面積	地目	面積
耕作地		2級地	200
1級地	448	3級地	184
2級地	1,033	4級地	62
3級地	959	小計	514
4級地	309	林地	
小計	2,749	1級地	3
果樹園	15	2級地	19
園地		小計	22
1級地	2	溜池	2
2級地	27	荒燕	37
小計	29	その他	36
牧地		合計	3,404
1級地	68		

ウェイトを持たないのは、意外な感じを起させる。土地利用の上からみて、主穀副牧タイプという方

の形態および構造との間に、甚しいゆがみが生じたとき、新たな均衡を求めて、形態・構造が徐々に変化する。集落とは本来そうしたものである。

四、土地利用と農業経営の問題

ブルターニュの農業は、至るところ三圃制の存在すること、工芸作物を断念して、土地の多くを家畜を養うために残していることによつて、特色づけられると、ドゥマンジュオンは述べている^⑤。しかしながら、実際は、牧場経済がノルマンディなどアルモリカン地塊縁辺部ほどに、大きい

が適切であつて、牧畜のもつ価値が、北仏のピカルディ程度に過ぎないことは、クラッツマンのみごとな図が示す如くである^⑥。パッセ村もこのような傾向を代表している。第二表は、この村の土地台帳に記された、一九一四年当時の地目別面積である。一八五八年現在、全体でこれより約一・七ヘクタールの減小をみている以外、地目別面積の上で、甚しい相違はない。これらの中でもつとも多いのは、耕作地であつて、これが総面積の八〇%を占め、牧地は僅か一五%である。もちろん台帳上の牧地のみが家畜を養うのではなく、耕作地に飼料用作物が栽培されることが多いから、単に台帳面から牧畜の価値を判断するのは早計である。そこで一九五六年の農業センサスをみることにしよう。

それによれば、農牧地の総計は三三一九ヘクタールで、その内訳は、耕作地二二八三(うち綴作地一四一五)、プレーリー一八九六、ぶどう畑一、蔬菜畑三六各ヘクタールとなつている。これは実際に利用されているものの面積を示したものであるから、したがつて台帳面積に対する農牧的土地利用率は九七%となつて、フランス平均の六二%、この県の平均七八%に比べて、まことに高率である。村を廻つて

みても、まとまつた森林も眼に付かなければ、また荒蕪地もあまり残されていない。ところで、第二表の台帳面積に對して、現在の土地利用状況を示すセンサス結果の面積は、耕作地について一七%減、牧草地について七五%増となつてゐる。これは、最近一世紀半以来の牧畜の發達に負うて、書きかえの少ない台帳面に耕作地と記されていても、實際は一時的牧草地に宛てられてゐるところが、かなり多いからである。單なる統計年次の違いに由来するものではない。しかしながら、このような事情を考慮に入れても、現在のプレーリーは、總農牧地面積の二七%を占める程度であつて、同年のフランス平均三八%には遠く及ばない。もともと本県の平均が二九%なのである。こういう点からも、この地方の農業経営が、牧畜よりも農業の方に大きいウェイトがかかつてゐることがわかる。

耕作地の六二%は、パン小麦・燕麦・大麦・とうもろこし、そば等の穀物栽培に宛てられてゐる。ただし、とうもろこしは、生産地のアキテース盆地から遠く離れてゐるので、あまり多くはない。そばは、湿润な氣候のブルターニユが、かつてフランス随一の生産地であつたが、化学肥料

の投入度が北フランスや地中海地域について高いこの県では、こういう収益の少ない作物は、次第に他の穀物にとつてかわられつつある。同様に粗放経営のメティユ麦は全く消滅し、裸麦は減少しつつある。これらに反して面積を著しく拡大したのが、パン用小麦であり、飼料用燕麦である。飼料としての大麦もやや増加の傾向にある。このほか小麦畑の裏作として作付されるばいしよは、この一〇〇年来、ブルターニユにおいて、めだつて増加して来た。いうまでもなく、養豚業の發達のためである。飼料かぶらも、同様な急増を示している。工芸作物としては、やや減少したが、まず菜種があげられる。しかし、十八・九世紀に盛んであつた亜麻を始め、大麻・タバコ等は、すつかりこの地方から姿を消してしまつた。都市向けの蔬菜栽培は、温暖な南の地域に盛んであるが、このパッセ村にても、若干行われている。果樹園としては、ぶどう畑をほとんどみないのは当然のことであるが、有名なシードル生産地帯に属しながら、センサスにりんご園の記載をみず、またそれが台帳面で果樹園に総括されていても、面積があまりにも少ないのは、いささか奇異な感じを懐かせる。それは、りんご樹の

間に作物が栽培され、りんご園が同時に菜園であり、穀物畑であるからである。囲いの外からりんごがみえても、内へ一歩足を踏み入れると、刈取つた小麦を乾燥させているような場合に、よく出会つたものである。

パッセ村では、一九五六年当時、二五三頭の馬、二六一九頭の牛（内乳牛一九五四頭）、九一八頭の豚（内牝豚七六頭）が飼養されていた。一農家当り、馬一、牛一〇、豚四の割合である。馬は労役に使用されるが、農業機械化運動の浸透によつて、次第にその役割は減少して来た。それにかわつて、この村ではすでに六〇台のトラクターが、個人または共同組合の手で購入されている。牛のうち七四%（県平均七〇%）は乳牛である。それは農家周辺の牧場で飼われ、屋内の搾乳器で乳がしぼられる。フランス全体からみると、乳牛の飼養は、かつての東北フランスよりブルターニュの方へ、中心地が漸次移行しつゝある。村ではまだ充分とはいえないが、酪農業はシードルと共に、次第に農家の家計の大きい支えとなりつゝある。養豚がこの一〇〇年間に著しい発展を遂げるに至つたことは、先に述べた如くである。このほか各農家では、たいてい五〇羽以上の鶏その他の家

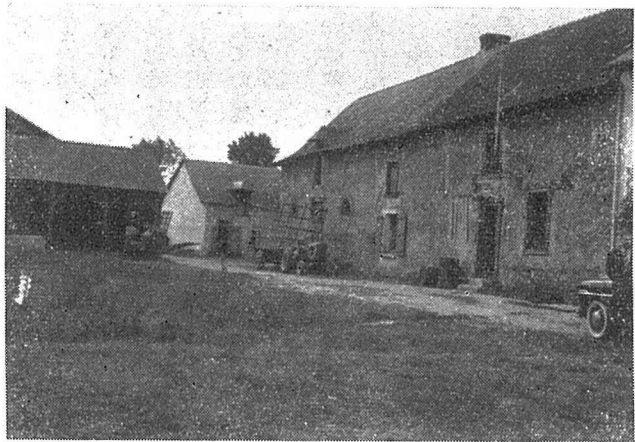
禽類が飼われている。^⑩

以上のような牧畜の発達は、牧草のよく育つ風土の再認識と、都市における需要の増大に負うものであるが、これはまたこの一世紀半以来の土地利用における変化の上にも、充分反映されている。ばれいしよ・飼料用かぶら・燕麦・大麦の増産も、これに関係あることはいうまでもないが、中でも人工牧草地の拡大が、とくにめだつて来ている。十八世紀末以来のことである。かかる牧草としては、うまごやしが主であつて、ほかにむらさきうまごやしも若干植えられている。新しい輪作体系の中に、一時的牧草地を挿入する現象こそ、古いシステムに変革をもたらしたものであるが、これによつて急激に牧草地の面積が増大したのは、漸く一世紀半前からである。そうしてこのような一時的牧草地の挿入こそ、いいかえると、いずれの場所も何年か後には家畜の放牧に宛てがわれねばならないということへの配慮こそ、多角的経営の畑にとつて、家畜の侵入を防ぐための囲いが必要ならしめている大きい理由である。しかもその配慮が村単位でなく、各農場毎に行われねばならぬ点に、囲い地の存続と発展を解く重要な鍵がある。したがつて、

この一世紀半以来のボカージュ景観の進化は、先述の個々の開拓の盛行に加えるに、牧畜の発達に伴う一時的牧草地の増加から、正当に説明しうるものである。

しからばこのような農牧地が、実際にはいかに経営されているか。いうまでもなくそれは輪作形態をとっている。しかし、ドゥマンジュオンの言葉から想像されるが如き三圃制は、十八世紀以前のことであつて、現在では、四圃と六圃の間断なき輪作が行われているのである。その形態は各農場によつてまちまちであるから、以下に若干の例を示しておきたい。

ソーヴェ家は、村内に畑二五ヘクタール、一時的牧草地五ヘクタールを所有し、南の隣村に七・五ヘクタールの永久放牧地を借地する準自作農である。彼は一一頭の乳牛、九頭の豚、約五〇羽の鶏を農場内で飼養し、八頭の若牛を夏季四〜一〇月の間遠方で放牧している。一台のトラクターを始め、耕耘機など主な農業機械六台を所有して、充分安定した農家の部類に属する。生産の中心は、小麦と牛乳とであつて、シードルはあまり多くは造らない。さて、彼の経営地における輪作形態は、五圃制がとられている。ま



パッセ村の準自作農ソーヴェ家

にかえるわけである。ドルウイエ家は、約二五ヘクタールの畑と、それと同面積の牧草地を経営する純自作農である。彼は乳牛二五頭、若牛三〇頭、豚二五頭、鶏約一〇〇羽を飼養している。やはり一台のトラクターを駆使し、

ず畑を大きく五区分し、その一つの作付を、仮りに第一年は小麦とすれば、第二年に大麦を植え、以下一時的牧草地↓小麦↓ばれいしよその他となつて、六年目に再び元

村内の小作農でも上位にある。主な生産物としては、毎日一二リットルを出す牛乳と、約六〇〇本のりんご樹から年産二四〇〇リットルを造り出すシードルとがある。シードルの仕込みは一〇〜十一月のところで、筆者が訪れた八月初旬には、まだ搾り器はほこりをかぶつたままであつた。さて、この農家がとる輪作形態は、うまごやし→小麦→飼料用かぶらまたはばれいしよ→小麦→燕麥→大麦またはうまごやしの如くであつて、六圃制となつている。しかも六年間作付したのは四〜五年間一時的牧草地にし、ておき、また右の輪転を繰返す場合もあるから、こうなれば七圃制となる。また五〜六年に一度だけ人工牧草地にすることもある。つまり輪作といつても、共同体的制約は何ら存在しないから、全く経営者の都合によつて、その実際は、いろいろと変化するものなのである。

以上の考察によつて、各経営単位毎の農牧地の配置が、ようやく前景にあらわれて来た。それは最小の集落細胞、すなわち第一次の集落単位である農場の空間的構造である。一般的にいうならば、中庭を囲む農家のまわりには、菜園と果

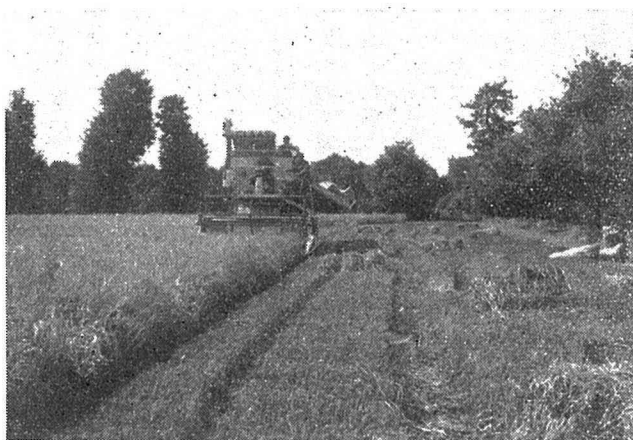
樹園とがあり、その外側または住居に接して乳牛のための牧場が配置されている。これら綿密な管理を必要とする地帯の外側が、普通の耕作地であつて、さらにその向うには若牛のための永久放牧地がある。ただしシードル地帯のため、りんご園がかなり外の方にまで及んでいる場合もみられる。集地域域においては、菜園・果樹園——牧場——耕作地——永久放牧地の空間的配列が、村単位で行われているのに対し、ここではそれが各農場単位となつている。したがつて村全体からみれば、地区別に截然としないで、自由でやや雑然とした田園景観となつてあらわれる次第である。

先にあげたマダム・ピノーの所有地やそれを小作するシモノー家の経営地は、団地をなして一箇所にまとまつていたが、散居集落地域であるからといつて、所有地ないしは経営地が、農家の周囲にまとまつていたとは限らない。たとえば三八ヘクタールを小作するモジ家では、そのうちの一五ヘクタールが屋敷から南方へ遠く離れていて、かなりの不便をかこつていた。こういう例は、他にもみられる。ただ日本の礪波や胆沢その他の如く、屋敷まわりの土地さえ他人に耕作されるといふような、極端な不都合は起つて

いない。やはり経営地の主要部は、農場をとり巻いて、散居をして大いに意義あらしめているのである。

最後に、近年における農業の動力化・機械化の問題に若干触れておこう。フランスにおいて、新しい農業動力化の運動はまだ

始まつたばかりともい
うべく、そ
れは漸く一
九四七〜四
八年以来の
ことに過ぎ
ない。その
ためにトラ
クターや新
しい農業機
械を購入す
る余裕のな
いものには、



困い地の中で窮屈そうに小麦を刈るコンバイン

共同組合を結成させた。それが目下最大の課題の一つをなすCUMAである。共同組合には、このほかサイロの如く農産物貯蔵のため、販売のため等、それぞれの目的に応じて、種々なるものがつくられている。これらが大発展を遂げたのは、一九五〇年以來である。そのおかげで、イー
ル・エ・ヴィレーヌ県においても、播種機や収穫機の普及には、北フランス並みに、かなりめざましいものがある。
しかしその他の機械はまだ充分に役立てられていない。パ
ッセ村においても同様である。困い地の中で、窮屈そうに
操作されているコンバインをみた筆者は、農業の動力化・
機械化の遅延理由が、およそ推測できるように思われた。

むすび

以上により、筆者は、レンヌ西北郊のパッセ村を中心として、ブルターニュにおけるポカージュの景観ならびに散居集落の構造と、その変化を考察した。この地方では、先史時代はいざ知らず、恐らくガロマン的な小村形態をとる土地占居が、オリジナルなものとして存在したが、十一〜十三世紀における西フランスの開拓期に際し、かかる小

村の外縁部に、個々の開墾に基づく散居農場を多数輩出せしめ、かくして小村と若干の散居農園を含む第二次的な集落構造ができあがつた。そういう中に、アモーの一つに教会が建立され、それはやがてブルに成長して、ここに農場Ⅱ小村Ⅰ町という第三次的な集落構造が成立した。しかしながら、十九世紀に入つて、一方では石灰の導入・交通の発展等から、新しい開墾期を迎えて一層散居景観が顕著となり、他方ではブルがますます成長して、村のもつさまざまな機能のサントルとしての役割を果すようになり、かくて個々の農場は今や疎となつたアモーを飛び越えて、直接ブルにつながるに至つたのである。これが新しい集落の構造である。さらに一般的な都市化が一層進行すれば、農場はブルさえも越えて、レンヌのような地方都市と直接関係をもつような形勢にある。

他方、農場の経営様式は、一八世紀末まではアンシャンレジムともいふべく、広い不耕地をそのままにして、狭いところで収益の少ない裸麦・メティユ麦さらには黒小麦と呼ばれるそばを輪転し、休閒地を伴う三圃制のものであつた。しかるに、十九世紀に入つて、石灰や磷酸肥料が

多量に投入されて土地改良が進んだ結果、パン小麦が増産され、ばれいしよ、飼料かぶら、うまごやしのような人工牧草等が盛んに栽培されて、牧畜は著しく進み、その上未開地はどしどし切り開かれていつた。農法は今や古い三圃制を捨てて、一時的牧草地を挿入する連続的栽培の四圃・五圃あるいは六圃制へと進化した。これはまさに、農業革命の名に価するものであつた。

しかしながら、右のような集落および農業経営の進化は、ただちに田園景観に表現されるものではない。農家に木材を供給し、ノロアを避け、村単位でなく各農場毎に家畜の侵入を防がねばならない、土堤と刈込木とから成るボカージュは、一部はガロマン期の古い土地割に規定されつても、この地域の性格に、アダプトした姿をあらわしていた。それは小村と農場、つまり分散的集落型と、多角的栽培を行い、かつ輪作体系に古くは休閒地を、新しくは一時的牧草地を挿入する農業経営のタイプに、充分適應するものであつた。集落構造が変化し、農法が変革を遂げて、ボカージュであることには変りはなかつた。とはいふものの、その姿は決して固定的ではなく、基調は変らないままに絶

えず創造と破壊とを繰返して来たものである。十八世紀にフランス全土を吹きまくった農業の個人主義的大風潮や、アーサー・ヤングをして、ランド・ランドまたランドといわしめたほど広い面積を占めていた荒蕪地の開墾によつて、ポカージュの景観は、十九世紀を通じて、拡大発展して行つたのである。

しかしながら、農業の動力化と機械化という今日の問題に直面して、このように發達して来たポカージュは、正しい解答を用意していかないように思われる。単にそれが排水を悪くするという事実からだけではない。永い居住史が経過するにつれて、土地の所有と利益関係は錯雑化し、自己の経営地に住居を接近させようとする散居集落本来の意義が、次第に失われつつある。これを改善するには、農牧地の再配分を行う必要がある。残念ながらポカージュは、このような事業を遂行するためには、大きい技術的障害となつてゐるのである。パリ盆地の開放耕地地帯が、この点で大きい成果をあげてゐるのに反し、ブルターニュでは、ほとんど成功した例がない。昨日の最善は、今日の障害というわけである。

- ① Demangeon, A.: France économique et humaine, T. I, pp. 186-207, 1946.
- ② Klatzmann, J.: La localisation des cultures et des productions animales en France, pp. 188-192, 1955.
- ③ Demangeon, A.: ouvr. cité, p. 218.
- ④ Demangeon, A.: ouvr. cité, p. 197.
- ⑤ Meynier, A. et Guilcher, A.: La XXXI^e excursion géographique interuniversitaire, Ann. de Géogr. No 307, 58^e Année, 1949.
- ⑥ Le Lannou, M.: Géographie de la Bretagne, T. I, p. 27, 1950.
- ⑦ Meynier, A. et Guilcher, A.: ouvr. cité.
- ⑧ ヲノハシ大学地理学教授 Grosjean 講師の御示教に依り。
- ⑨ Le Lannou, M.: ouvr. cité, T. I, p. 174.
- ⑩ Le Lannou, M.: ouvr. cité, p. 177.
- ⑪ Annuaire statistique de la France, 1958, 4th 算定。
- ⑫ Meynier, A.: La Commune rurale française, Ann. de Géogr. No 295, 53^e~54^e Année, 1945.
- ⑬ Meynier, A.: ouvr. cité.
- ⑭ Section plans et cartes, Bibliothèque Nationale à Paris.
- ⑮ L'Abbé Expilly: Dictionnaire géographique, historique et politique des Gaules et de la France, T. V, 1768.
- ⑯ Carte No 128, Bibliothèque Nationale.
- ⑰ Meynier, A., Pâtier, A. etc.: La Carte des Communes

- de France, Ann. Eco. Soc. Civ. 13^e Année, N° 3, 1958.
- ②⁷ Demangeon, A.: ouvr. cité, p. 197.
- ②⁸ Demangeon, A.: Une carte de l'habitat, Ann. de Géogr. N° 237, 42^e Année, 1933.
- ②⁹ Demangeon, A.: Essai d'une classification des maisons rurales, dans "Problèmes de géographie humaine" 1937.
- ②¹⁰ Faucher, D.: Evolution des types de maisons rurales, Ann. de Géogr. N° 296, 53^e-54^e Année, 1945.
- ②¹¹ Platières, P.: La structure rurale du Sud-Finistère d'après les anciens cadastres, Norois, N° 15-16, 1957.
- ②¹² Guilcher, A.: L'habitat rural à Plouvrien, Bull. de la Soc. Archéol. du Finistère, T. 74-75, 1950.
- ②¹³ Le Lannou, M.: ouvr. cité, T. I, p. 202.
- ②¹⁴ Le Lannou, M.: ibid.
- ②¹⁵ Platières, P.: L'étendue des finages villageois en Bretagnes, Norois, N° 18, 1958.
- ②¹⁶ Mendras, A.: Études de sociologie rurale, Novis & Virgin, p. 18, 1953.
- ②¹⁷ Demangeon, A.: France économique et humaine, p. 219.
- ②¹⁸ Klatzmann, J.: ouvr. cité, Carte de l'utilisation des terres en France.
- ②¹⁹ Klatzmann, J.: ouvr. cité, p. 359.
- ②²⁰ Diville, W. et Guilcher, A.: Bretagne et Normandie, pp. 48-51, 1951.
- ②²¹ Le Lannou, M.: Géographie de la Bretagne, T. II, pp. 23-64.

本書を「ブルターニュ」の地方の集落研究に際して直接御指導を頂いたシルホンスのG・シャポーおよびA・ベルゴニエ両教授、ハッセ村を紹介して頂いたレンヌ大学のA・メイニエ教授、現地でお世話になったビノー村長および村役場書記、イール・エ・ヴァレーヌ県のセルヴァス・マシヨール当局の方々に、深く感謝の意を表する次第である。

——一九五九、七、一八記——

and barons, and to protect the feudal privileges of barons. Protection for the privileges of vassals under barons and citizens in borough and for the least means of peasants and serfs were made as a result of economic organization in the feudal society, having a secondary importance. There were, indeed, some doubtful passages in Magna Carta, which caused king's despotism, with a continual struggle of king against barons. Though the then rank construction which became the object of Magna Carta was fairly intricate, we are going to study its process of formation, its history, and its transition.

The Construction of Dispersed Settlements in Bretagne

—mainly on *Pacé* village in the suburb of *Rennes*—

by

Taheo Tanioka

It may be important to reexamine the fact that dispersion of resident units and management of ranches have ever been over-emphasized in the dispersed settlements typically in the western France. According to our fact-finding last summer, the life in écart is impossible without the existence of concentration in small chef-lieu, and agricultural management is found unexpectedly to be many-sided.

The formal corresponding relation in 'corn-raising—open-field—concentrated settlements' with 'ranch-management—enclosure—dispersed settlements', or between settlement and management, should be urged in justification of our researching direction, but this cannot be of full correspondence. Here in Bretagne the structure of 'dispersed farms—small villages—bourg' is changing into that of 'dispersed farms—bourg' and in use of farm land the three fields system mainly of cereals changes into the many fields system mainly of wheat for bread and fodder-crop with fruit-trees growing. Such evolution of settlements and agricultural management has brought the development of bocage landscape but in contrary has partly interrupted the development of the present-day rural villages.